

## 趣意書（賛助会員入会のご依頼）

拝啓 時下、皆さまにおかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、かねてより準備してまいりました「レビー小体型認知症研究会」（以下、本会）の設立をお知らせするとともに、本会の内容についてご紹介をさせていただき運びとなりました。幸いにして、本研究会には日本を代表するレビー小体型認知症等に関する多くの研究者や臨床家にご賛同いただき、日本で最初でありかつ本格的な研究会となるべく、まさに活動を開始しようとしているところであります。

この度の趣意書では、皆様方に本会をご理解いただくために、その設立の背景と活動の内容、そしてその活動により期待される成果を記しております。つきましては、下記ご高覧の上、趣旨にご賛同いただき賛助会員としてのご入会を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

### 記

#### 設立の背景

周知のように、他国に先んじて超高齢社会となろうとしているわが国において、今や認知症は最も大きな課題の一つとなっております。その中で最も有名であり患者数が多い疾患はアルツハイマー型認知症ですが、現在ではそれに次いで**2番目に多い認知症はレビー小体型認知症 DLB や認知症を伴うパーキンソン病 PDD**（以下、「レビー小体型認知症」と総称）であるといわれるようになっております。

ただし、アルツハイマー型認知症に比較して、レビー小体型認知症については、一般社会のみならず医学会においてもその認識は長い間不足してきたと言わざるを得ません。小阪の1976年以降の一連の研究報告によりこの疾患が国際的に知られるようになり、1995年にいたって第1回 DLB 国際ワークショップが英国 Newcastle upon Tyne で開催され、その場において当該疾患をレビー小体型認知症と称することが決定され、国際的な医学会において急速に注目を浴びることとなりました。さらには、2006年11月には第4回 DLB/PDD 国際ワークショップが日本で初めて開催され、日本がレビー小体型認知症の研究における一大拠点として世界的にも認められたことになり、事実、現在の国内における臨床的・基礎的研究への機運はかつてないほどの盛り上がりを見せようとしております。

上記のような背景の中、私たちは、わが国の認知症医療が大きな転換点を迎えていることを強く認識し、**レビー小体型認知症についての臨床的・基礎的研究を進め、当該疾患で悩まれている多くの患者様とご家族に一日も早くより優れた治療を提供する礎を築きたい**という一念のもと、本会を発足するにいたりました。

## 活動の内容と期待される成果

本会は以下の活動を主たる内容としております。

- ① レビー小体型認知症に関する臨床・病理・基礎研究活動
- ② レビー小体型認知症に関する各種啓発活動
- ③ その他、本会の目的を達成するために必要な活動

上記活動の中でも、現在最も重要性・緊急性が高く初年度から最優先で取り組むべき活動は、①レビー小体型認知症に関する臨床・病理・基礎研究活動です。具体的には、レビー小体型認知症のさらなる病理学的な解明と、より明確な診断基準の提唱、さらには基礎研究も踏まえたより洗練されたレビー小体型認知症の治療戦略の構築などがそれにあたります。本会では、本邦においてはまだ不十分な各種の研究に対し、専門家集団による質の高いオピニオンの形成や精緻なデータ収集が行われることが期待されます。この結果、レビー小体型認知症における治療の質を高めることに繋がるとともに、ひいてはより有効な薬剤の開発に繋がることも想定されます。

また同時に、②レビー小体型認知症に関する各種啓発活動も実施していく計画をしております。上記研究の参加者間における活発な意見交換やその研究結果の共有に伴い、適切で有効な治療や薬剤使用に関する臨床現場への効果的なフィードバックとともに、一般市民に対してもより分かりやすい疾患啓発活動を行えるものと期待しております。

最後に、他国に先んじて超高齢社会となろうとしている本邦において行われる世界でも先駆的なレビー小体型認知症に対する取組は、近い将来においてグローバルなレベルでの貢献に繋げることができるものとも期待しております。

つきましては、繰り返しになり恐縮とは存じますが、是非とも本会の趣旨をご理解頂き、暖かいご支援を賜るとともに賛助会員（会費：年五万円）としてご入会いただきますよう、心よりお願い申し上げます。なお、賛助会員は研究会等に参加し、意見を述べることができますので、活発なご意見をいただければ幸いです。

2018年4月吉日

レビー小体型認知症研究会

代表世話人 小阪 憲司（横浜市立大学名誉教授）